

◆ 論文

近代日本の博覧会に関する研究と課題

西尾 典子*

0. はじめに

2025年に、日本において万国博覧会（以下では、単に万国博と略述する…執筆者注）が開催される¹。万国博とは、国際的な博覧会である。この万国博は、いわゆる万博とも略称される。2025年に開催される万国博とは、日本国際博覧会（大阪・関西万博）のことである。

では、そもそもこの博覧会とはどういったものごとを示した言葉であるのか、せっかくの機会であるのでここは一つ立ち止まって考えてみることにしよう。ひとまずの取っ掛かりとして、辞書的な意味合いを確認しておく。辞書や辞典によると、博覧会とは「種々の産物を蒐集展示して公衆の観覧および購買に供し、産業・文化の振興を期するために開催する会」であり²、またあるいは「種々の産業や学術・技芸などの振興のために、生産品、天然物、文化財などを広く集めて展示し、人々に見せる催し物」のこととある³。

つまり、産業や技術あるいは文化の発展に寄与するような様々なモノを収集し、それらを多くの公衆の面前にて披露する催しに、博覧会という名前が冠せられているのである。これが、博覧会の広義の意味であると定義することができる。この博覧会については、すでに各分野より多面的・多角的な研究蓄積が図られており、その規模は数多の星のようであるといえる。

本論文の目的は、これらの多岐にわたる論考の中で、この博覧会と呼ばれるものがそもそもどのように理解され、そしてそれが歴史学上のテキストでどのように位置づけられるものであったのかについて、確認することにある。この目的を達成するため、本稿では博覧会をテーマとする論考をサーヴェイすることに重点を置いている。

さて、この作業を行っていくうえで、誤解を招かないように最初に断っておくことがある。それは、この論文において博覧会について書かれた論考の無作為の抽出と書評を行うことは、執筆者の望むところではないということである。そして、それらを並べ立てて博

¹ 2025年に日本において開催される万国博については、公式ホームページが詳しい。<https://www.expo2025.or.jp/overview/> 最終確認日 2023.01.31 10:00

² 新村出 (2008), 2333 頁。

³ 小学館国語辞典編集部 (2006), 48 頁。

*久留米大学 商学部

覧会論を展開したり、批判したりすることは目的とはしていないし、博覧会の歴史そのものを中核において研究を行う予定も今のところはない。それ故に、執筆者がこの作業を行う方針や動機を最初に述べておくことが賢明であろう。

博覧会に関する研究をサーヴェイしていくにあたり、一応の方針を示しておこう。本稿では、先達の研究者たちがすでにまとめた研究動向について、大いに参考にしていくつもりである。そしてその作業と並行しつつ、執筆者がこれまで行ってきた技術史を中核とする産業史や、経営史・経済史をベースとした研究の視角にも立脚し、独自の視点を打ち出していくことも、本稿の目的の一つとなる。もう少し踏み込んでおくと、日本の経済や産業、もっと細かく言えば、日本の地域経済や地場産業とリンクさせて博覧会を捉えるために必要であるから、一連のサーヴェイを試みるのである。

そのため、詳しくは後述するが、吉見俊哉（1992）より前に提示された分析視角を注視し、技術史や産業史を中核とする研究潮流を重要視しつつ、かつ日本国内において展開された博覧会に焦点を当てていくこととする。その上で、サーヴェイを通して博覧会研究が内包する課題についても、この場合副産物的であろうが見えてくるであろう。

1. 近代日本における「博覧会」の種類—研究史整理を通じて—

博覧会についての辞書的な意味合いについては、「はじめに」でも述べたとおりである。では実際に開催されていたそれらがどのようなものとして、あるいはどのような関心をもって研究史上にとらえられてきたのか確認していこう。

武部善人（1968a）は、明治時代の勸業諸策の中で重要な位置づけを担った存在として、博覧会・共進会を並立して位置づけ、その歴史について概要を紹介した⁴。その後、山本光雄（1970）では、近代日本に関係した博覧会について、歴史的に体系立てて、それらの沿革や残存する関係資料などについても整理がなされた⁵。これによると、博覧会の根本は、「衆知を一堂にあつめ各自の見聞を博くし、一国産業の奨励、百般事業を促進して国家の富強を期すること」にあるとされている⁶。

山本光雄（1970）では、博覧会とそのほかの催し物のとの相違や、日本における博覧会の由来についても区分が設けられている⁷。これによると、博覧会以外の催し物としては、展覧会、共進会および品評会、フェア（見本市）の存在が指摘されている。この論考においては、博覧会と共進会とが区分して位置づけられたのであった。そして、これらの博

⁴ 武部善人（1968a）、2頁。

⁵ 山本光雄（1970）の著者紹介によると、山本光雄は1915（大正4）年に中央大学を卒業後、博覧会の事業団体である日本産業協会に入り、1926（大正15）年、パリ万国博に本部の出品のために渡仏するなど、内外合わせて29もの博覧会企画に携わった人物である。

⁶ 山本光雄（1970）、23頁。

⁷ 山本光雄（1970）、25-29頁。

覧会以外の催し物の特徴として、博覧会と比較して会の規模が小さいこと、出品物品の範囲の狭さや種類の特殊性、限定性などが挙げられている。

その上で、山本光雄（1970）では、博覧会を主に①日本国内で開催された内国勸業博覧会（以下、単に内国博と略述する…執筆者注）、②日本が海外で開催される万国博へ参加することを前提として、国内で開催された主要な博覧会、③海外で開催された万国博、④日本で開催された万国博の4つに分類して、それらの概況と沿革について解説している。山本光雄（1970）が編まれた段階で、博覧会とそれ以外の催し物の区別が設けられ、そして博覧会も少なくとも万国博と内国博に大別され、それぞれに対して説明が加えられたということをここでは強調しておく。

山本光雄は著書の中で、自身が博覧会に関する研究者ではないことを強調しているが、山本光雄（1970）は、歴史的な時間軸を用いて近代期に催された博覧会と呼ばれるイベントを網羅的にまとめた高い専門性を有する書籍として位置づけることができる⁸。山本光雄（1970）が出版された同年に、吉田光邦（1970）も出版されている。1970年は、大阪万国博が開催された年であり、佐野真由子も指摘しているように、日本において本格的な万国博研究が展開されていく契機となった年であった⁹。

この画期となった1970年以降の研究の潮流を確認していく。まず、それらの研究のタイトルだけを概観していくと、とくに初期の研究に顕著であるのだが、博覧会というものに焦点を当てた分析の中で、とくに万国博に多くの関心が注がれていたことがわかる。

この傾向は、山本光雄（1970）や吉田光邦（1970）に先んじて出版された春山行夫（1967）からも確認できる¹⁰。研究書として、春山行夫（1967）をどのように位置づけるのかについては、ここに至るまで様々な議論があったと考えられるし、少々のアイデアも必要となるであろう。しかし、戦後のいわゆる現代日本において、戦前期の日本が関係した博覧会について、歴史的に振り返ることの先駆けとなった著作であるということには相違ない。

いずれにしても、春山行夫（1967）から山本光雄（1970）、吉田光邦（1970）にかけてのラインが、博覧会に関する研究の黎明であったと位置づけることができる。この後、吉田光邦を中心として、京都大学人文科学研究所を中心に1970 - 80年代を通じて、学際的

⁸ 山本光雄（1970）、419頁。

⁹ 佐野真由子（2015）、3頁。詳しくは後述するが、万国博覧会に関する研究の現時点での一応の到達点は、佐野真由子のけん引する研究会を中心に編まれた一連の研究群である。これらの研究は、きわめて学際的な色彩が強い。本稿で万国博覧会を考察する際にも、依拠するところが多い。しかし、経済史・産業史の分析視角からみた場合には、先行史整理が不十分な部分も見受けられる。そのため、佐野真由子の研究史整理に加えて、経済史・産業史の視覚から近代日本の博覧会がどのような意味を持つものであったのかを考察しつつ、研究史の再 positioning を図る。

¹⁰ 吉田光邦（1970）、244-245頁によると、吉田光邦（1970）の先行的な論考として、春山行夫（1968）が位置づけられていることが確認できる。

な研究蓄積が図られた¹¹。その成果となったものが、吉田光邦編（1985）、並びに吉田光邦編（1986）であった。この2冊は、「万博の研究に携わる者にとって今も基本文献の位置を占める」著書として定置されている¹²。

ではここで、万国博研究の基本文献である吉田光邦（1970）や吉田光邦編（1986）の各章のタイトルだけではなく、実際に書かれている内容に着目してみたい。これらの中身に目を転じると、付せられているタイトルとは異なって、単に万国博研究のみが興味関心の対象であったわけではなく、両文献の中で博覧会について広く分析されていたことがわかる。

具体的に説明していくと、吉田光邦（1970）では、近世期の博覧会的な催しであった本草会・薬品会¹³、同じく江戸時代において市中で行われていた見世物の存在についても言及されている¹⁴。近代期については、明治時代に日本国内で開催された内国博について、個別に章を設けて第4章「内国勸業博覧会の歩み」で詳述している¹⁵。つまり、吉田光邦（1970）は『万国博覧会』と題しつつも、万国博と内国博の両方を論じていたのである。

この傾向は、吉田光邦編（1986）にも表れている。吉田光邦編（1986）を分析していくと、編著タイトルの通りに万国博に興味関心を注ぐ論考もある一方で、内国博について分析した論考も存在する¹⁶。加えて、一つの論考の中で内国博と万国博との両方を論じているものや¹⁷、地方で開催された博覧会について論じているもの¹⁸、万国博と内国博そして共進会をリンクさせて分析している論考もある¹⁹。つまり、さまざまな博覧会に関する研究が出揃いつつも、それらが万国博研究というラッピングの中に詰め込まれていたのである。

換言すると、1980年代半ばまでは、万国博研究と呼称しつつも、それらの内実としては、万国博だけではなく内国博や共進会などについても横並びで論じられていたのであった²⁰。つまり、この時点で万国博研究と呼ばれている研究の内実とは、それらを分析した担い手が「博覧会」と認識した催しに関する研究であったといえるのである²¹。つまり、日

¹¹ 佐野真由子（2015）、3頁。

¹² 佐野真由子（2015）、3頁。

¹³ 吉田光邦（1970）、14-24頁

¹⁴ 吉田光邦（1970）、25-28頁。

¹⁵ 吉田光邦（1970）、25-28頁。

¹⁶ 具体的には、小野芳朗（1986）、芳井敬郎（1986）が挙げられる。

¹⁷ 具体的には、園田英弘（1986）、日野永一（1986）が挙げられる。

¹⁸ 具体的には、丸山宏（1986）、P・F・コーニッキー（1986）が挙げられる。

¹⁹ 具体的には、相川佳予子（1986）が挙げられる。

²⁰ 清川雪彦（1988）、358頁によると、博覧会と共進会は競争的市場の形成を通じて、品質改善や技術改良を促進するといった共通点が指摘されており、この機能が日本の経済発展に与えた影響力が決して過少ではなかったとの分析がなされている。

²¹ 詳しくは、内国博について論じる第3節で説明するが、博覧会に関する研究の到達点としては、明治政府の博覧会政策について分析した國雄行（2005）、國雄行（2010）が挙げられる。これらの研究は、日本近

本近代史研究をベースとしつつ、万国博研究を名乗っている研究には、日本近代で起きた政治過程や行政の紆余曲折に影響されるかたちで、万国博と内国博とが同居している特徴を看取することができるのである。そのため、これらの研究は広くあまねく「博覧会研究」であったと再定置した方が、学術史上に位置づける際の混乱が少ないといえる。

この傾向は、1990年代になると徐々に変化を見せ始めた。既述した万国博と銘を打ちつつ実質は、博覧会研究を行っているこれらを一つの研究群として捉えると、吉見俊哉（1992）が1つの分水嶺となっていることに注目できる。吉見俊哉（1992）は、万国博や海外の事情について詳述したのち、明治期の日本において執り行われた内国博についても言及している。つまり、博覧会と銘を打った研究の枠組みを提示したうえで、万国博と内国博とに関して意識的な区別を設け、検証したのであった。

また、吉見俊哉（1992）においては、筆者自身が明言している通り、「何らかの技術的、経済的、様式的な発展の中で博覧会が果たした役割」を問題とするのではなく、「博覧会に集まってきた人々の社会的経験の歴史として捉え返す」ことに主眼が置かれた。吉見俊哉（1992）は、政治学的な分析視覚から、政治史や都市、あるいは空間やまなざし、スペクトルなどの蠱惑的なキーワードを散りばめ、博覧会をめぐる様々な視点があることを打ち出した。その上で、サブタイトルで政治学と銘を打ちつつも、実際のところその主眼は多分に社会学的ないしは社会史的な興味関心に置かれて分析された論考であるといえる。この研究が出されたことにより、博覧会や万国博研究の分野において、一種のイノベーションが起きた。

同書に対する的確な書評としては、永井良和（1993）が挙げられ、この書評においても同書が社会史であることが言及されている。加えて永井良和（1993）によると、吉見俊哉（1992）の重点は、同書の「中盤に横たわる社会史的記述（あるいは「ヒストリカル・エスノグラフィー」）の部分」に置かれたことについても指摘されている。吉見俊哉（1992）の冒頭でも述べられている通り、吉見俊哉の興味関心は、それ以前の博覧会研究が分析対象として重視した技術・産業・経済・様式といった点にはなく、あくまで人々の社会的経験の部分为社会史的に読み解くことに重点が置かれていたのであった。

この吉見俊哉（1992）以降、研究史上では、博覧会・万国博・内国博といったキーワードが分離されて考えられるようになっていった。その後の代表的な博覧会研究の担い手としては、國雄行を挙げることができる。詳しくは後述するが、國雄行も、万国博と博覧会を切り離して検証した。國雄行は、博覧会そのもの全体に焦点を当て、網羅的かつ精緻な分析をおこなった。具体的な研究としては、國雄行（2005）ならびに（2010）を挙げるこ

代史の分析視覚から博覧会について検討が加えられている。前者においては、内国博を中心に分析がなされ、後者においては、明治期の日本に関わりを持った各種の博覧会行政について網羅的な分析がなされた。

とができる²²。

これらの論考を念頭に置いて、今一度博覧会という言葉で表現されている催しにどのような種類があったのか、ここで再分類しておく。この後の節においては、ここで行った分類に基づいて各種の博覧会に関して、どのような研究蓄積が図られていったのかについて考察していく。そのため、この作業は必要不可欠なものである。

博覧会を種類別に分類すると、山本光雄（1970）が行っているように、まず万国博と内国博の二つに大別できる。加えて、丸山宏（1986）、P・F・コーニッキー（1986）を参考にすると、万国博と内国博のほかに地方博覧会（以下、単に地方博と略述する…執筆者注）が存在したことが確認できる。また、石山洋（1964）、相川佳予子（1986、308頁）や清川雪彦（1988）、中岡哲郎（1988）、日本産業技術史学会編（2007）などの叙述からも顕著なように、近代日本の産業政策上、共進会の影響が大きかったことも確認することができる。これらを鑑みると、近代日本における博覧会の種類は、Ⅰ．万国博、Ⅱ．内国博、Ⅲ．共進会、Ⅳ．地方博、のおよそ4種類に大別することができる。山本光雄が博覧会以外の催し物に分類した共進会が、なぜこの分類に含まれるのかについては、第4節で詳述する。

次節からは、この4つの分類に基づきつつ研究史をサーヴェイしていく。

2. 「万国博」の研究史

既述の通り、万国博に関しては1970年以降吉田光邦を中核として、京都大学人文科学研究所を中心に学際的な研究蓄積が開始された²³。この万国博をめぐる京都大学のこの営みは、その担い手をかえつつ現在まで続けられている。現在における万国博研究の第一人者としては、既述のごとく佐野真由子を挙げることができる。

そして、現段階において万国博研究の到達点としては、佐野真由子のけん引する研究会を中心に編まれた一連の研究群であるといえる。この研究会を通して蓄積が進みつつある研究は、吉田光邦らの跡を継いだ研究を引き継いだ次世代版、21世紀の万博論集を目標とした研究となっている。それらの研究成果は、佐野真由子編（2015）並びに佐野真由子編（2020）に所収されている。

ロンドン万博を中心に、地方都市や労働者に関して研究を行っている重富公生も、佐野真由美編（2015）は吉田光邦の衣鉢を継ぐ研究であり、「対象への新たな視角や接近方法が盛り込まれている」と評価している²⁴。重富公生（2017）も指摘しているように、ここ

²² 國雄行の一連の研究蓄積については、第3節で詳述する。

²³ 伊藤真実子（2008）、3-4頁の記述にみられるように、1980年代以降にカルチュラルスタディーズやポストコロニアル研究の影響を受け、欧米諸国で万国博研究が盛んになり、その後には様々な国においても万国博に関する研究蓄積がはかられたとする意見もある。

²⁴ 重富公生（2017）、142頁。詳しくは後述するが、重富公生は多数のロンドン万国博に関する論考を執筆している。

で発表された研究は、さまざまな分野から万国博を分析したものであり、きわめて学際的な色彩が強く、その内容も多岐にわたっている。それらをまとめて、これら編著の方向性を示したものが、佐野真由子（2015）並びに佐野真由子（2020）である。ゆえに、万国博についてのサーヴェイを行うに当たっては、佐野真由子（2015）並びに佐野真由子（2020）に依拠しつつ、それで補えない部分については、それ以前の研究や博覧会研究の中核的な存在である國雄行（2010）なども参照しつつ、整理していくことが妥当であろう。

ここで一つ注意しておきたいことは、万国博研究は膨大な量に登るため、いずれの研究においても、そこまで網羅的な研究史整理が行われていないということである。万国博に関する記事や、それに関連した企業や人物、出品物などを扱った研究すべてを網羅しようとするならば、それはまた別のサーヴェイ論文を準備しなくてはいけなくなるであろう。

ではまず、佐野真由子（2015）に注目しておこう。吉田光邦らが研究成果を残して以降、日本の万国博研究は膨大な量に上っている²⁵。ここから佐野真由子が発見したことは、これらの研究の傾向の一つとして、万国博を考える際の視線の偏重がみられることであった。それは、欧米諸国で開かれる万国博において、日本がどのように自己の展示を構成し、それが受け取られてきたかという問題に強い興味関心が注がれてきたことと関係している²⁶。これらの研究の中で日本の万国博参加は、政治史上も外交史上も、ドラスティックな出来事として位置づけられてきたのであるが、視点を換えて、主催国側から眺めれば、日本の万国博参加は「大概は一斉に片づけられる事務処理の一環」に過ぎず、淡々と処理された出来事なのであった²⁷。どうやらこの気付きが、その後の佐野真由子らの旅の起点となったようである。

当該研究会の方向性が掴めたところで、その後に編まれた佐野真由子編（2020）の序章である佐野真由子（2020）を確認していこう。佐野真由子（2020）では、万国博研究の系譜を吉田光邦以降の研究であるとざっくり位置付けた佐野真由子（2015）の場合とは異なり、あるところまでは先行研究整理ができています。これに基づいて、万国博研究の系譜をまとめつつ、一定の理解を深めることは可能であろう。

まず、万国博の歴史を知る上で欠かせない存在となる通史としては、平野繁臣（1999）と Paul Greenhalgh（2011）が代表的な先行研究であり²⁸、このほかにも万国博を統括する国際機関である BIE（Bureau International des Exposition / 博覧会国際事務局、在パリ）の報告などの存在が指摘されている²⁹。

²⁵ 佐野真由子（2015），4頁。

²⁶ 佐野真由子（2015），4頁。

²⁷ 佐野真由子（2015），5頁。

²⁸ 佐野真由子（2020），34頁

²⁹ 佐野真由子（2020），4頁。

次に万国博が、結果として世界各地で長期にわたって開催されていく事業となっていった点に着目されている。その嚆矢として、1862年に行われた第2回のロンドン万国博こそが、重要視されるべき万国博の始まりであると位置づけられている³⁰。そして、その論拠として英語圏を中心に積み重ねられてきたロンドン万国博に関する研究の存在が示された。その代表的な成果として、Jeffrey A. Auerbachらによる一連の研究成果や、Louise Purbrickによる編著が紹介されている³¹。

しかし、これら英語圏でなされたロンドン万国博研究を実際に読んでみると、1851年に開催された第1回目の万国博をも重視していることがわかる。この点は、佐野真由子が指摘していることと異っていると見える。ちなみに、第1回のロンドン万国博に関しては、日本語圏で行われている研究史上においても重要視されている。例えば国雄行（2010）においても、「一八五一年ロンドン万国博の成功は万国博流行の発端」となった歴史的な出来事として位置づけられている³²。加えて国雄行（2010, 16-17頁）では、第2回ロンドン万国博は第1回と比較して歴史的な評価が低いことも指摘されている。加えて、佐野真由子（2020）では捨象されているのであるが、執筆者が確認したところ、1851年ロンドン万国博に関しては、日本においても重富公生によって研究蓄積が図られていることを付け加えておく³³。

佐野真由美（2020, 5頁）では、Auerbachの研究によって、イギリスが万国博を開催する目的は明確に自国産業の育成にあり、世界の物産を集めたうえで、実質的には内国向けの勧業博覧会であったことが指摘されていたことも確認出来る。この視点は、産業史研究の見地より万国博へ光を当てていく際に不可欠となる視角であるともいえよう。

さて、イギリスで万国博が世界で初めて開催されたことを契機として、世界各国で万国博が開催され始めたのは周知のとおりである³⁴。万国博は、1851年にロンドンで開催されて以来、1853年にニューヨーク、1855年にパリ、1862年に再びロンドン（第2回）、1867年に再びパリという具合に、立て続けに各国で開催された。もちろん、1867年以降も1873年ウィーン、1876年フィラデルフィア、1878年に三度びパリというように各国で開催され、この潮流はその後も引き継がれていくこととなった。

これら世界各地で開催された万国博の中で、日本近代史という枠組みで捉えた際に最も

³⁰ 佐野真由子（2020），4頁。

³¹ Jeffrey A. Auerbach（1999），Louise Purbrick 編（2001），Jeffrey A. Auerbach, and Peter H. Hoffenberg 編（2008）。

³² 国雄行（2010），16頁。

³³ 具体的には、重富公生（2001）、重富公生（2005a）、重富公生（2005b）、重富公生（2007）、重富公生（2009）、重富公生（2012）が挙げられる。

³⁴ 山本光雄（1970），199-205頁並びに、松村昌家（2014），2頁。松村昌家（2014）は、イギリスにおいて開催された博覧会について、詳細に分析した研究書である。

多くの興味関心をさらっていったのは、1867年のパリ万国博であろう。なぜなら、このパリ万国博は、日本が最初に参加した万国博であったからである³⁵。そのパリ万国博に焦点を当てた研究としては、吉田邦光（1970）、石川澄雄（1970）、宮沢真一編（1988）、ロザリンド・H・ウィリアムズ（1996）、木山実（1998）、北垣徹（2001）、杉本竜（2008）、瀧井一博（2013）、佐野真由子編（2015）に所収されている種々の論考、栗田啓子（2015）、寺本敬子（2017）、蒲地孝典（2018）など、数多くの論考を挙げることができる。

その後のウィーンやフィラデルフィアで開催された万国博についても、それぞれ研究蓄積が図られている。吉田邦光（1970）と佐野真由子編（2015）以外の論考に着目しておくと、ウィーン万国博に関しては、橋詰文彦（1998）、角山幸洋（1999）、友田清彦（1999a）、友田清彦（1999b）、内田星美（2000）、三浦泰之（2001）、戸田清子（2007）、戸田清子（2010）、藤原隆男（2016）、ペーター・パンツァーほか編（2022）などを、フィラデルフィア万国博に関しては、村形明子（1986）、畑智子（1998）、関根仁（2001）などを挙げることができる。

万国博に関する研究は、既述のごとく数多の星のようであり、ここにそのすべてを列記するには紙面が足りないであろう。ここには、近代日本の産業政策や博覧会行政へ及ぼした影響が特に大きかったとされる万国博と、それらを分析した代表的な研究を並べるとどめる。これら万国博の特性は、「一見平和にみえる」が、「その実態は各国の工業力を競う経済戦争の一形態」であったことが指摘されている³⁶。仮初めの平和な世を支配していたのは、軍事力ではなく工業力や科学力だったのである。そして、それらが闘ぎ合う万国博は、「太平の戦争」だったのであった³⁷。

3. 「内国博」の研究史

内国博は、万国博を日本向けにアレンジして、規模を縮小して開催されたもので³⁸、明治新政府によって推進された殖産興業政策の一翼を担った催しであった³⁹。このため、内国博は万国博の有した性格、つまり競争的な側面であるとか、優劣を決する場といった特性を内包するものとなった。

内国博は明治時代に5回開催され、在来産業を奨励し、欧米技術の移植を推進するなど、近代日本の工業化に貢献した⁴⁰。周知のとおり当該期は、西欧科学や制度移植による怒涛

³⁵ 石川澄雄（1970）、18頁。

³⁶ 國雄行（2005）、9頁。

³⁷ 國雄行（2005）、34頁。「太平の戦争」については、久米邦武編（1982）、22頁。

³⁸ 國雄行（2005）、10頁。

³⁹ 清川雪彦（1988）、340頁においても内国博が経済的に重要な意味を持っていたことが指摘されている。

⁴⁰ 國雄行（2005）、10頁。

の如き近代化が企図されていた時期である。近代への道は果てしなく、かつ移ろう時代の奔流の中で、明治政府は欧米列強の脅威へ対抗するために、富国強兵を達成することを目的としており、欧米から技術を移植して急速な工業化を推進するという殖産興業政策を展開させていた⁴¹。この一環として、内務省を主な推進役として一連の博覧会事業が採用されていたのであった。そして勿論その先には、産業革命を成し遂げて、西欧文明を越えて振り切ることも見据えられていた。

既述の通り、内国博については山本光雄（1970）において解説が加えられた。加えて、万国博研究の嚆矢であると位置づけられてきた吉田光邦（1970）においては、万国博研究と内国博研究が複雑に入り組んで混在していた。この混沌は、意識的というよりは、多分に無意識的に惹起されたものであったといえる。そのため、この吉田光邦の研究に正確な名前を付けるとしたら、山本光雄のそれと同じく「博覧会」研究とするのが妥当であろう。別の見方をすれば、吉田光邦（1970）はある程度体系立てた博覧会研究それ自体の嚆矢であるために、そういった意味で山本光雄（1970）と同様、内国博研究においても先行研究として位置づけることができるのである。

これよりも前の研究で、内国博に関して論じたものには、大阪の産業発展を検証した宮本又次（1957）、陶磁器工業の出品動向を調査した塚谷晃弘（1965）が挙げられる。加えて、1980年代に行われた研究としては、管見の限り、内国博の前史となる京都博覧会を扱った丸山宏（1986）、内国博の出品されたものについて着目した井上義博（1987）、博覧会と共進会に共通項を見出し、その意義を考察した清川雪彦（1988）が挙げられる。

この時期に行われた多くの研究は、どのような出品物があったのかといった興味関心や、地域研究の一環として内国博を捉えたものが多く、体系立てて内国博を論じるものは少なかった。これらの研究の中でもとくに清川雪彦（1988）に着目しておくこと、ほかの研究とは異なる要素を垣間見ることができる。清川雪彦（1988）では、共進会については後述に譲るが、内国博を含む博覧会が近代日本の経済発展に与えた影響が考察された。清川雪彦論文の登場により、近代日本の経済あるいは産業発展に博覧会がいかに寄与したのかという視点が、初めて投げかけられたのである。そして、このことがその後の研究を前進させていくこととなったのである。

いま述べたことを、時系列的に整理しておくこと、①1950 - 60'sには内国博に関して地域的・出品物に注目した研究が書かれ始め、②続く70'sにおいては万国博研究の一環として内国博に言及する研究も散見され始めたが、それは微々たるものであったといえる。③80'sには、内国博に徐々に目が向けられるような状況も見られたが、それでも同年代の前半では体系立てるという意味で十分な検証がなされたわけではなかった。後半期にな

⁴¹ 國雄行（2005），10頁。

ると清川雪彦論文にみられるように、博覧会という催し自体の意義を客観的に捉え、それが有する機能が経済発展に与えた影響などをも視野に入れた検証がなされるようになっていった。

内国博に関する研究蓄積が本格化したのは、1990年代に入ってからである。それ以前において、内国博そのものに焦点を当てて体系立てた検証が行われたことはほぼないと言ってよい。繰り返しになるが、1990年代に博覧会に関する分析視角を明確に分け、内国博に関する膨大な研究蓄積を推進し、その後に万国博も含む博覧会研究へと昇華させた研究者は、國雄行であった。國雄行の研究蓄積にも着目しつつ、この年代に盛んとなった内国博研究の動向を跡付けていく。

ではここで、1990年代の研究動向を確認しておこう。1990年代に入ると、公衆衛生の視点から内国博を考察した小林丈広（1990）が発表されている。また、内国博に出品されたものを分野別に検証した大槻敬史（1990）、井上義博（1995）も確認出来る。加えて、これら以外には、地域研究の一環として内国博についても検証した横山恵美（1995）、村山友彦（1997）も発表された。

そして、内国博そのものに焦点を当てた研究蓄積も発表され始めた⁴²。それが、國雄行による研究蓄積であり、1991年に『中央史学』に掲載された國雄行（1991）に端を発している。この研究は、第一回の内国博について分析したものである。この研究を皮切りに、國雄行は内国博について次々と研究蓄積を行っている。その後の研究動向を確認していくと、國雄行（1993）において内国博についての基礎的なことを検証した論考がまとめられ、1999年には「近代日本と博覧会」というテーマで科研費を取得している。そしてこの後、國雄行の内国博に関する研究は、1990年代から2000年代にかけて熱心な蓄積が図られていくこととなったのであった。

2000年代の國雄行の研究動向を鳥瞰しておこう。2000年代に入ると、國雄行の研究蓄積は、さらに加速していくこととなる。まず、國雄行（2002b）では、第三回内国勧業博覧会について検証され、國雄行（2003）では、第四回内国勧業博覧会の出品物について分析された。続く、2004年には國雄行（2004a）と國雄行（2004b）が発表され、2005年には単著書となる『博覧会の時代』が出版された。加えて、同年中には第五回の内国博とその開催地となった大阪について分析した國雄行（2005b）も刊行され、一連の研究成果を踏まえた集大成となる学位性申請論文も上梓された⁴³。

⁴² 具体的な研究としては、國雄行（1991）、國雄行（1993）が挙げられる。

⁴³ 國雄行（2010）は、これらの研究蓄積をもとに、同シリーズの方針上やや一般向けのものとして書かれたものである。ここで、吉川弘文館の歴史文化ライブラリーから出版された論考を研究史上に位置づける際の注意点について述べておこう。ここで述べることは、決して國雄行（2010）の問題点ではなく、執筆者は同シリーズの編集方針上なり構造上の課題であると捉えているということを最初に断っておく。同シリーズは、一般読者を対象とした読みものとして出版されているため、学術書であれば当然必要となる脚

2000年代以降、田原昇（2006）や小野まさ子（2006）、橋爪伸子（2017）、國雄行（2020）などにみられるように多岐にわたる分析視角から、多様な担い手によって現在進行形で研究蓄積が図られている。

4. 「共進会」の研究史

ここでは、共進会に関する研究について鳥瞰していく。共進会は内務省で作られた用語であり、フランス語のコンクール（競争会）の和訳である⁴⁴。日本産業技術史学会編（2007, 14-15頁）によると、フランスの制度を模倣して1879年に製茶共進会ならびに生糸繭共進会が開催されて以来、1880年には政府主導で綿糖共進会が開かれた。

この後も共進会は、農産品、金工品、菓子などの産業別・商品別に会が存在し、百花繚乱の様相を呈した。共進会は、「多くの場合手工業によって出来上がった物の成績品の陳列という意味が勝って」おり、「互いに作品の優劣を競」うものであり、各分野において製品製造に関する技術力や品質の向上へ貢献することにその本懐が置かれた⁴⁵。そのうえで、出品物に対する審査・批評が加えられるということに特色があった。

共進会に関して扱った論考や資料としては、青森県農業総合研究所編（1954）、服部一馬（1959）、日本科学技術史学会編（1964）、工藤恭吉（1964）、昼田栄（1967）、武部善人（1968a・b）、武部善人（1973）、京都府（1973）、高嶋雅明（1983）などを列挙することができる。

これらの研究の特徴をまとめると、次の3つの点が指摘できる。①は、明治政府の行った諸政策を産業史という視座から照らし出した際に、共進会の役割が無視できないものとして位置づけられている点である。②は、明治期の地域経済を分析するうえで、共進会の資料群を活用して研究がなされているという点である。③は、共進会自体の持つ特徴に引張られるかたちで、産業別あるいは商品別の個別研究であるとか、資料収集などの取り組みが、各分野ごとに進められたという点である。

繰り返しになるが、共進会研究の分水嶺は、清川雪彦（1988）に求めることができる。清川雪彦（1988）によると、この研究の先行史に我妻東策（1937）、土屋喬雄（1944）、武部善人（1973）が挙げられている。これらの研究は、清川雪彦（1988）以前の研究上で、日本経済と共進会の存在について言及したものであった。比較対照していくと、清川雪彦

注や引用などの出典の明記が充分になされていない特徴を有している。しかしながら、このシリーズの書籍中には、筆者のオリジナリティーも多々含まれている箇所も存在し、先行研究として捨象できない場合も多い。そのため、國雄行（2010）に限らず同シリーズから出版された著書らについては、そこに書かれている内容が著者オリジナルのものなのか、それとも出典が明記されていないだけのその他の先行研究と同じ内容のものなのか、1つずつ確かめていく必要があり、非常に煩雑である。

⁴⁴ 國雄行（2002b）、36頁。

⁴⁵ 山本光雄（1970）、25頁。

(1988)においては、既述のとおり共進会と博覧会とが並立して論じられているが、共進会について、体系立てて論じる端緒を開いたという意味で、革新的な研究であったと位置づけることができる。清川雪彦は、1988年以降の研究成果をまとめ、清川雪彦(1995)を発表した。これらの研究によって、共進会研究の地保が固められたといえる。

この後の共進会に関する研究を鳥瞰しておこう。清川雪彦が一連の研究を発表した後、共進会をめぐる研究には、新しく一つの潮流が誕生することとなった。それは、清川雪彦の研究によって既知のこととなった、共進会が産業発展にとって役立ったとする結論に向かって、種々の産業分野の何かに焦点を当て、特に代わり映えのしないファクトファインディングを行う研究である。これらの研究は清川雪彦のフレームワークをテンプレートとし、雨後の筍のように現れた⁴⁶。これらの研究は、ケース・スタディを増やして、清川雪彦研究を跡付けた点で、清川雪彦論文の正確性を傍証するために役立っているといえよう。

これらの研究以外にも、目を転じることとしよう。國雄行(2002b)は、共進会を推進した行政機関である内務省の政策へ焦点を当て、農業を進展させる政策の一環として、当初構想されていた農業博覧会が、その名称を共進会へと変貌させながら実現していった過程を丹念に分析した。この論文によると、共進会は農区制度と不可分の関係にあり、全国・府県連合農区・府県・郡村などというように、複層的なブロックを設けて、地域別でも全国レベルでも開催することが企図されていた⁴⁷。加えて、明治政府が共進会を設立した目的は、参加者や事業者を鼓舞することであり、これによって産業育成に弾みをつけようとすることにあったのである⁴⁸。そして、その波及効果が極めて高かったことも確認された。

このように、共進会はその出品物も、開催地域も多岐にわたる催しであった。そのため、共進会に関する研究も、それに引っ張られるかたちで百花繚乱の模様を織りなす特徴を有している。とくに、2000年代以降は地域社会を主たる担い手として、貴重な資料を保存しつつ、新しいファクトへとつなげる重要度が高く挑戦的な試みがなされている。須合宏道(2000)、西原町史編集委員会編(2003)、坂祝町教育委員会町史編纂事務局編(2004)、井出弘人(2018)は、その代表的な論考であると位置づけることができる。

共進会については、地域社会や農業、あるいは都市論といった視座からも、経済史や産業史なども踏まえて学際的な議論がなされている。それらに研究としては、土金師子(2012)、大瀧真俊(2013)、山口由人(2015)、丸山美季(2018)が挙げられる。加えて、戦前と戦後の商取引市場をつなぐ要素として、博覧会や共進会を位置づけた張楓(2010)もある。さらに、共進会をめぐる研究の学際性を際立させているのは、長尾洋子(2009)や

⁴⁶ これらの研究群には、橋野知子(2000)、岡部桂史(2003)、橋野知子(2007)、がある。

⁴⁷ 國雄行(2002b)、35-41頁。

⁴⁸ 國雄行(2002b)、37頁。

平光睦子（2017）といった論考の存在である。これらの研究にみられるように、美術史や芸能史の視座からも、共進会について考察が加えられている。

5. 「地方博」の研究史

近代日本の地方博を扱った研究を鳥瞰すると、現在地として万国博研究などに比べると、圧倒的にその蓄積が希薄であることが確認出来る。地方博は、戦前・戦後を通して日本の各地で行われていた催しである⁴⁹。地方博に関するまとまった研究としては、福間良明ほか編（2009）を挙げることができる。最初に断っておくと、これらの研究よりも先に地方博に着目した研究は、個別に各自治体で開催されたものや出品物を調査したものが存在している。あくまで、体系立ててまとめられた研究がないというだけのことである。

ここで、福間良明ほか編（2009）に注目するのは、これより前の段階では、この編著のように地方博についてまとめた研究がなかったことと、これが発表されたことにより、地方博そのものに焦点を当てた議論が活発化する画期となったことを重視したためである。ここではまず、それら一連の議論を整理し、地方博とはどのようなものであったのかについて一応の見解を固める。そして、その次に個別の地方博研究についても目を転じ、それらをまとめてみたい。

さて、地方博という呼称は、どのようなものを示しているのであろうか。福間良明ほか編（2009）によると、管見の限り同書内において地方博と呼称されているものについて、特段の定義付けや概念規定は行われていない。ではこの研究の中で、どのようなものを地方博と呼んでいるのかということ、「地方レベルの博覧会」のことを、漠然と地方博と呼称していることが確認できる⁵⁰。さらに、どうやら地方博とは「万博や国家レベルの博覧会」と比較対象した際に、地方において開催された博覧会全般のことを指しているようである。

この点に関して、議論を広げたのは石上敏（2012）であった。石上敏（2012）では、福間良明ほか編（2009）について「地方博覧会とは何であるかということ、その定義にせよ、あるいは一覧であってもいいが、本書からは地方博覧会の全貌どころか、地方博覧会が一体何であるかが今一つ見えてこない」との指摘がなされている⁵¹。そして、戦前期に「地方博覧会（地方博）」という呼称を用いられて開催された、各自治体・地方レベルの博覧会は存在しないとのファクトが示された。石上敏（2012）によると、「地方博覧会」（地方博）という呼称が一般化したのは、岡山博・高松博・松山博が同時開催された1949（昭和24）年がその始まりであったとされている⁵²。

⁴⁹ 坂田謙司（2009），239頁。

⁵⁰ 福間良明（2009a），1頁。

⁵¹ 石上敏（2012），79頁。

⁵² 石上敏（2012），78頁。

つまり、戦前期の日本において地方博覧会あるいは地方博という呼称で開催、あるいは一般にそのように認識されていた博覧会は、存在しなかったのである。ゆえに、戦前期において地方で開催された博覧会を「地方博」と呼称するのは、あくまで便宜上に過ぎないのである。これらの諸問題を提示したうえで、石上敏論文では、各自治体で開催された博覧会について、それぞれの正式な名称が示され、地方で開催された博覧会の意義について言及されている。

そして、それらに払底する共通の論理を見つけ、地方で開催された各種の博覧会が、一体何ものであったのかということをも再定置させるための模索がなされた。ここでは、地方博に関しては、その概念規定や定義がまだ不十分な点があり、この地方博という呼称が内実としてどのようなものを示しているのかについては、まだまだ議論や考察の発展段階にあることを強調しておこう。

石上敏論文が発表された2012年は、地方博に関する考察が進展した年であったといえる。この年には、石上敏(2012)のほかに、地方博そのものの存在に焦点を当て、網羅的に検証した論考である大貫涼子(2012)が発表されている。この大貫涼子論文では、初期の地方博とそれへの出品物が整理され、それぞれの博覧会がどのような目的をもって開催されたのかについて言及された。これは、「資料が残されていないこともあり、具体的な内容について」の検証が進んでいない地方博研究を一步前進させるための研究成果であるといえる⁵³。大貫涼子(2012)では、地方博の一覧を提示したうえで、明治期を通して地方博の目的や開催の方法論が、時代の変化に沿ったかたちでどのように変化していったのかについても言及された。地方博を開催する目的としては、教育効果や地域の活力増強などに重点が置かれていたことも解説されている。

地方博について、その定義や概念規定がまだ十分になされていない要因としては、大貫涼子論文でも指摘されているように、残存する資料の不足から地方博への検証が不十分であることが大きいと考えられる。そのため、石上敏論文で模索がなされているが、地方で行われた博覧会を地方博と呼称するのが適切であるのかということや、仮に呼称として地方博を用いるとしても、その内実がどういうものを指しているのかについては、やや明確性を欠いているといえれば欠いているのである。この点に関して言えば、個別の事例研究の積み重ねも含め、今後の研究の進展を待つしかないともいえる。

これらの研究成果を踏まえて、本稿では戦前期において各地方で開催された博覧会について、便宜上「地方博」という呼称を用いて表現している。

さて、ここで地方博に焦点を当てた論文について、網羅的に確認しておこう。地方博を扱った研究は、1980年代から発表されている。横山秀樹(1980)は、新潟県において開

⁵³ 大貫涼子(2012), 4頁。

催された地方博に焦点を当てた研究であり、P・F・コーニッキー（1986）では明治5年の和歌山博覧会について検証されている。丸山宏（1986）は、日本で初めて開催された博覧会である京都博に焦点を当てた。

2000年代には、福間良明ほか編（2009）が出版され、これに所収された石田あゆ（2009）と坂田謙司（2009）が、それぞれ大阪で開催された地方博と北海道で開催された地方博に焦点を当てた。この他に、同年には長谷川司（2009）が発表され日向国の事例に焦点を当てて、地方博に関する考察が進められた。この2009年以降、地方博に関する議論が活発化したのは既述のとおりである。2010年代に入ると、石上敏（2012）や大貫涼子（2012）のように地方博の全容について把握し、その内実を検証しようとする論考も生じるようになった。

この傍らで、各地方博に焦点を当てたケース・スタディズに関しても蓄積が図られた。明治時代の地方博について検証した研究には、筑摩県の地方博を事例とする塩原佳典（2012）や、長崎県の地方博を事例とする佐野実（2021）がある。戦前期において地方博は、明治期だけではなく1930年代にも盛り上がりを見せたのであるが、その時代については、金沢を事例とした小川玲美子（2015）や富山県を事例とした尾島志保（2016）が確認出来る。

このように2010年代以降、地方博に関しても研究蓄積が進展してきている。今後の見通しとしては既述した地方博とは何ものなのかといった問いにも、いずれどこかで共通解が生まれそうである。

6. その他の博覧会

ここでその他として括っているのは、現段階でこれらの博覧会をどのカテゴリーに位置付けることができるのか思案中だからである。どういうことかという、個別のカテゴリーを設けて、なにがしかの定義をしたうえで整理した方がよいのか、あるいは、既述した分類のどこかに入れた方がよいのか決め兼ねているというのが正直なところである。独断しない方がいいことも研究上あるであろうという考えから、一旦ペンディング中ということである。

その一つが、日英博覧会（以下では、単に日英博と略述する…執筆者注）についての研究である。日英博は、1910（明治43）年5月14日から10月29日まで、イギリスのロンドンのシェファーズブッシュにおいて開催された⁵⁴。日英博に関して言及した研究としては、河村一夫（1981a）、河村一夫（1981b）、河村一夫（1982）、國雄行（1996）、イアン・ニッシュ編（2002）、伊藤真実子（2008）、末岡照啓（2018）が挙げられる。この中で、日

⁵⁴ 國雄行（1996）、65頁。

英博そのものに焦点を当て、この催しの実態に迫った研究は國雄行（1996）である。

次に、植民地博を博覧会の分類上、どのように位置づけていけばよいのかという問題もある。例えば、植民地博について、これを地方博の枠組みでとらえることは可能なことであるのか、否かについて、まだ議論もなければ結論も出ていない。植民地博は、博覧会全体で見たときにどのような位相に捉えることができるのであろうか、このような問いに関しても、なお一層の研究蓄積が必要となっていくのであろう。植民地博を取り扱った研究は、まだそれほど出揃っているともいい難いが、松田京子（2003）、河西晃祐（2006）、山路勝彦（2008）、河西晃祐（2012）がある。

また、戦時博についても、これがどのような実態を伴うものであったのか、そして博覧会の分類としてどのような位相に位置付けられるものなのかについて、さらなる研究蓄積が待たれるところである⁵⁵。

7. 総括

本稿では、近代日本における博覧会について、分類を明確にし、それぞれの研究史を再定置することを試みた。本稿の第1節では、先行研究の整理を通じて、近代日本の博覧会を種類別に分類することを試みた。この結果、近代日本の博覧会を、Ⅰ. 万国博、Ⅱ. 内国博、Ⅲ. 共進会、Ⅳ. 地方博、のおよそ4種類に大別することができた。この4種類に分類した後に、これらのどこにも分類できない博覧会を、その他の博覧会として位置づけ、それぞれの研究蓄積について、本稿の第2節以降でサーヴェイを試みた。

第2節では、万国博に関する研究蓄積について検討を行った。万国博は、世界各国がそれぞれの産業革命の成果を咲き誇らせた、いふなれば「華」の宴であった。そこで「華」となったのは、主に科学技術力の粋を凝縮して製造された物品や、構築された空間であった。それらの製造能力の背後にあったのは、当然産業革命を達成して手に入れた工業力であった。この工業力を見せつけるかたちで、表面上平和を装いながら、各国がその国力を顕示し競いあったのである。これが、万国博をして「太平の戦争」と評せしめた所以であった。「太平の戦争」である万国博では、各国がその威信を託したパビリオンや出展物が百花繚乱の呈を織り為し、その容色や威光を競い合うこととなったのであった。

この万国博自体のありようが、蓋然的に万国博研究の特徴を規定していく側面もあった。万国博の様相は、それらを対象とした研究に残照として現れており、分野を問わず世界各国で多岐にわたる学際的な研究がなされている。本稿は万国博研究に主眼を置くものではないので、近代日本の博覧会の分類に必要な主要な研究のみに脚光を当て抽出した。ゆえに、万国博を専門的に研究する場合には、本稿で行った先行史整理ではまだ網羅

⁵⁵ 戦時博については、福間良明（2009b）が挙げられる。

できておらず不十分であり、さらなるサーヴェイが必要となることを付け加えておく。

第3節では、内国博に関する研究蓄積について検討を行った。内国博は、万国博を日本国内向けにアレンジしたものであった。すでに欧米で盛んであった万国博や、その準備段階の博覧会の枠組みを模倣し、日本国内において小規模化して実施したミニチュアだったのである。そのため、内国博は万国博の持つ序列付などの競争的な側面を引き継ぐ催しであった。明治時代に5回開催された内国博は、政府の悲願である富国強兵を成就させるために重要となる殖産興業政策の一翼を担い、在来産業を奨励し、欧米技術の移植を推進するなど、近代日本の工業化に貢献した内国博は近代化に向けて加速し続けた時代の重要な産業政策であった。

この内国博に関しては、その黎明期には万国博研究などと並行するかたちで研究蓄積が進められた。内国博研究が急速な発展を始めたのは、1990年代以降に國雄行がその研究を推進し始めたことにその画期を見出すことができる。國雄行による一連の研究は、内国博そのものに焦点を当てたものであり、1990年代から2000年代にかけて熱心な蓄積が図られた。これにより、内国博が近代日本において果たした役割が明らかとなっていった。その後、現在に至るまで多くの担い手によって多角的・学際的な視座から内国博についての検証が行われている。

第4節では、共進会に関する研究について検証した。共進会は、フランス語のコンクール（競争会）を手本とした催しで、内務省によって推進された。共進会の特徴は、農産品、金工品、菓子などの産業別・商品別に会が存在し、専門特化した部門に分かれていたことにある。そして、そのそれぞれの部門において、製品の製造技術や品質などが競われた。

この共進会に関する研究を体系立てた上で、より精緻な議論の枠組みを構築したのは、清川雪彦であった。清川雪彦の研究蓄積により、共進会が近代日本の産業発展にとって大いに役立つ装置であったことが確認された。このことが、その後に共進会研究を進展させる画期となったのであった。内務省の共進会政策について焦点を当てた國雄行（2002b）では、当初構想されていた農業博覧会が、その名称を共進会へと変貌させながら実現していった過程が分析された。そして、共進会が日本全国を複層的なブロックに分けて、地域別でも全国レベルでも開催され、この催しの目的が参加者や事業者を鼓舞することであり、これによって明治政府が産業育成に弾みをつけようとするものであったことが明らかにされた。共進会については、地域社会や農業、あるいは都市論といった視座からも、経済史や産業史なども踏まえて学際的な議論がなされているだけにとどまらず、美術史や芸能史の視座からも、多岐にわたった考察が加えられている。

第5節では、地方博に関する研究について検証した。この地方博については、本文でも述べた通り、議論が少々複雑となっている。地方博に関する議論を複雑化させているのは、石上敏（2012）で明らかにされたように、戦前期の日本において地方博あるいは地方博覧

会という呼称を用いられて開催された、各自治体・地方レベルの博覧会は存在していなかったということである。このような事実があるにもかかわらず、地方で実施された博覧会のことを何らの概念規定や定義づけもなく、便宜上これらを「地方博」と呼び、それらに焦点を当てた研究蓄積が図られた。結論から言えば、未だに発展途上にある研究分野である。

しかし、地方博に関する研究は、万国博や内国博について論じたものと比すると数が少ないが、1980年代から存在し、2010年代ごろから現在に至るまで徐々にではあるが学際的ともいえる研究蓄積が図られてきている。このような蓄積の先に、現段階で地方博と呼ばれているものがどのような特徴を有し、そして近代日本においてどのような役割を果たしたのかということをも、解明されるときも来るのではないかと考えられる。

第6節では、本稿の第2節から第5節までで述べた分類に属さない博覧会に関する研究について概観した。この節に属する博覧会としては、①日英博、②植民地博、③戦時博を分類した。これらの博覧会に関しては、研究史も薄く、どのような博覧会だったのか体系立てる要素が現段階においては出揃っていないと判断した。今後、研究蓄積が進んだ際に、これらの催しを、博覧会全体の中でどのような位相に捉えられるものなのかという考察も可能となっていくだろう。

本稿での整理を通じて、博覧会を開催したことや出品したことのディグニティに焦点を当てた研究群と、その博覧会に出品された品々が経済的・社会的にどのような意義があったのかを明らかにしていく視点が交錯していることが確認できた。経済史的・産業史的な視点から博覧会を論じる際には、もちろん前者の視点を捨象することはできないものの、より後者の視点に重点を置いた検証が必要となる。

参考文献

- 相川佳予子（1986）「博覧会と染織」吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版
青森農業総合研究所編（1954）『青森県りんご史資料』青森県農業総合研究所
我妻東策（1937）「国会開設前後の農政（上）」『農業経済研究』3-1・2
イアン・ニッシュ編（2002）『英国と日本』博文館新社
石川澄雄（1970）「1867年パリ万国博と日本」『日本歴史』263
石上敏（2012）「博覧会の諸相」『大阪商業大学商経学会』7-4
石田あゆ（2009）「昭和前期と国産洋服博覧会」福間良明ほか編『博覧の世紀』梓出版社
石山洋（1964）「第6章 博覧会・共進会の時代」日本科学技術史学会編『日本科学技術史大系 第1巻通史1』第一法規出版
伊藤真実子（2008）「博覧会研究の動向について」『史学雑誌』117-11
伊藤真実子（2008）『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館
井上義博（1987）「内国勸業博覧会における稲扱の出品について」『研究紀要（名古屋市博物館）』11
井上義博（1995）「博覧会資料の民具研究への活用を考える」『民具マンスリー（神奈川大

- 学)』28-1
- 内田星美 (2000) 「技術史の原点 (30)」『東京経大会誌 (経営学)』
- 海野福寿編 (1982) 『技術の社会史』第3巻 有斐閣
- 海野福寿 (1982) 「外来と在来」海野福寿編『技術の社会史』第3巻 有斐閣
- 大槻敬史 (1990) 「体操用具国産化への道」『北海道大学教育学部紀要』54
- 大貫涼子 (2012) 「地方博覧会の変容 (序論)」『國學院大學博物館學紀要』37
- 大野真由 (2016) 「明治7年における若松博覧会」『駒沢史学』86
- 小川玲美子 (2015) 「1930年代金沢の観光都市への転換」『デザイン理論』65
- 尾島志保 (2016) 「地方博覧会と観覧者層」『富山市民俗民芸村村報』2
- 小野まさ子 (2006) 「『第二回勸業博覧会解説書』にみるジュゴン史料について」『史料編集室紀要 (沖縄県教育委員会)』31
- 小野芳朗 (1986) 「博覧会と衛生」吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版
- 蒲地孝典 (2018) 「万国博覧会の華・明治伊万里 (有田焼)」『西日本文化』485
- 河西晃祐 (2006) 「南洋スマラン植民地博と大正期南方進出の展開」『日本植民地研究』18
- 河西晃祐 (2012) 『帝国日本の拡張と崩壊』法政大学出版局
- 河村一夫 (1981a) 「明治四十三年開催の日英博覧会について (上)」『政治経済史学』181
- 河村一夫 (1981b) 「明治四十三年開催の日英博覧会について (中)」『政治経済史学』186
- 河村一夫 (1982) 「明治四十三年開催の日英博覧会について (下)」『政治経済史学』190
- 北垣徹 (2001) 「万国博覧会と国際会議」『人文学報 (京都大学)』84
- 木山実 (1998) 「三井物産草創期の人材とその海外活動」『愛知大学経済論集』
- 清川雪彦 (1988) 「殖産興業政策としての博覧会・共進会の意義」『経済研究 (一橋大学経済研究所)』39-4
- 清川雪彦 (1995) 『日本の経済発展と技術普及』東洋経済新報社
- 京都府編 (1973) 『京都府畜産のあゆみ』京都府畜産会
- 工藤恭吉 (1964) 「明治末期における上層農民の経営状態」『早稲田大学商学同致会』170・171 合併号
- 國雄行 (1991) 「第一回内国勸業博覧会について」『中央史学』14
- 國雄行 (1993) 「内国勸業博覧会の基礎的研究」日本史研究会編『日本史研究』375
- 國雄行 (1996) 「1910日英博覧会について」『神奈川県立博物館研究報告 人文科学』22
- 國雄行 (1999-2000) 「近代日本と博覧会」(科研費)
- 國雄行 (2002a) 「第三回内国勸業博覧会の開設」『文化国際研究』6
- 國雄行 (2002b) 「内務省の勸農政策 (1873～1881年)」『社会経済史学』67-6
- 國雄行 (2003) 「第四回内国勸業博覧会の出品物分析」『文化国際研究』7
- 國雄行 (2004a) 「第四回内国勸業博覧会と京都」『文化国際研究』8
- 國雄行 (2004b) 「博覧会時代の開幕」松尾正人 (2004) 『明治維新と文明開化』吉川弘文館
- 國雄行 (2005a) 『博覧会の時代』岩田書院
- 國雄行 (2005b) 「第五回内国勸業博覧会と大阪」『文化国際研究』9
- 國雄行 (2005c) 「博覧会の時代」中央大学 博士学位申請論文 (史学) 乙第351号
- 國雄行 (2010) 『博覧会と明治の日本』吉川弘文館
- 國雄行 (2020) 「農商務省初期の勸業諸会にみる農政」『人文学報 (首都大学東京)』48
- 久米邦武編 (1982) 『特命全權大使米欧回覧実記』5 岩波文庫

- 栗田啓子 (2015) 「パリ万博における『社会経済』」『経済学論究 (関西学院大学)』69-2
- 小林丈広 (1999) 「京都における『公衆衛生の行方』」『京都市歴史資料館紀要』7
- 坂田謙司 (2009) 「第九章 北海道の地方博覧会」福間良明ほか編『博覧の世紀』梓出版社
- 佐野真由子編 (2015) 『万国博覧会と人間の歴史』思文閣出版
- 佐野真由子 (2015) 「はじめに」佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』思文閣出版
- 佐野真由子編 (2020) 『万博学』思文閣出版
- 佐野真由子 (2020) 「序説・万国博覧会という、世界を把握する方法」佐野真由子編『万博学』思文閣出版
- 佐野実 (2021) 「明治初期の博覧会政策にみる地方社会の多様性と序列化」『21世紀アジア学研究 (国士舘大学)』19
- 塩原佳典 (2012) 「明治初年代における地方博覧会の歴史的意義」『日本歴史』768
- 重富公生 (2001) 「万国博出品からみた19世紀半ばヨーロッパ分業圏—1851年ロンドン万国博試論—」『国民経済雑誌』183-6
- 重富公生 (2005a) 「1851年ロンドン万国博出品趣意書にみる商品販売」『松山大学論集』17-2
- 重富公生 (2005b) 「1851年ロンドン万国博覧会の表彰問題をめぐって」『国民経済雑誌』191-4
- 重富公生 (2007) 「19世紀半ばイギリス産業の自己認識—1851年ロンドン万国博余剰金の使途を巡って—」『国民経済雑誌』195-3
- 重富公生 (2009) 「1851年ロンドン万博開催と地方産業界」『神戸大学経済研究年報』56
- 重富公生 (2012) 「1851年ロンドン万国博覧会と労働者」『国民経済雑誌』206-5
- 重富公生 (2017) 「書評 佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』」『社会経済史学』83-2
- 小学館国語辞典編集部 (2006) 『精選版 日本国語大辞典』第三巻 小学館
- 白井泉 (2018) 「博覧会と産地ブランドの形成」『社会経済史学』84-1
- 末岡照啓 (2018) 「近代住友の広報戦略と別子銅山写真帳」『住友資料館報』49
- 杉本竜 (2008) 「藤波言忠の明治33・34年欧米巡行について」『日本歴史』718
- 関根仁 (2001) 「1876年フィラデルフィア万国博覧会と日本」『中央史学』24
- 関根仁 (2020) 「渋沢栄一と万国博覧会」佐野真由子編『万博学』思文閣出版
- 園田英弘 (1986) 「博覧会時代の背景」吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版
- 高嶋雅明 (1983) 「明治期有田地方の産業政策と野田四郎」『和歌山県史研究』10
- 瀧井一博 (2013) 『明治国家を作った人びと』講談社
- 武部善人 (1968a) 「明治前期の日本産業と貿易 (一)」『大阪府立大学経済研究』13-4
- 武部善人 (1968b) 「明治前期の日本産業と貿易 (二)」『大阪府立大学経済研究』13-5
- 武部善人 (1973) 『明治前期産業論』ミネルヴァ書房
- 田原昇 (2006) 「近代木曾林業と第2回内国勸業博覧会」『徳川林政史研究所研究紀要』40
- 土屋喬雄 (1944) 『明治前期経済史研究 第1巻』日本評論社
- 塚谷晃弘 (1965) 「第1回内国勸業博覧会と明治初期の陶磁器工業」『國學院大學政経論叢』14-1
- 角山幸洋 (1999) 『ウィーン万国博の研究』関西大学経済・政治研究所
- 寺本敬子 (2017) 『パリ万国博覧会とジャポニズムの誕生』思文閣出版
- 戸田清子 (2007) 「明治前期における中等工業教育の展開」『研究季報 (奈良県立大学)』

18-1・2 合併号

- 戸田清子 (2008) 「万国博覧会と産業振興」『研究季報 (奈良県立大学)』 18-3・4 合併号
- 戸田清子 (2010) 「近代日本における博覧会の産業振興的意義と役割」『地域創造学研究』 20-2
- 友田清彦 (1999a) 「ウィーン万国博覧会と日本農業」上『農村研究 (東京農業大学)』 88
- 友田清彦 (1999b) 「ウィーン万国博覧会と日本農業」下『農村研究 (東京農業大学)』 89
- 中岡哲郎 (1988) 『博覧会』 朝日新聞社
- 中岡哲郎 (1999) 『自動車が走った』 朝日新聞社
- 永井良和 (1993) 「書評 吉見俊哉『博覧会の政治学—まなざしの近代—』」『社会学評論』 44-2
- 新村出 (2008) 『広辞苑 (第七版)』 岩波書店
- 日本科学技術史学会編 (1964) 『日本科学技術史大系 第1巻通史1』 第一法規出版
- 日本産業技術史学会編 (2007) 『日本産業技術史事典』 思文閣出版
- 橋爪伸子 (2017) 『地域銘菓の誕生』 思文閣出版
- 橋詰文彦 (1998) 「ウィーン万国博覧会の展示品収集」『信濃』 50-9
- 長谷川司 (2009) 「戦前地方博覧会における地域イメージの構築」『総合政策研究 (関西学院大学)』 31
- 畑智子 「1876年フィラデルフィア万国博覧会の概要と「日本」の出品状況について」『加茂文化研究』 6
- 服部一馬 (1959) 「製茶共進会と集談会」『貿易と経済 (横浜市立大学)』 73・74 合併号
- 春山行夫 (1967) 『万国博』 筑摩書房
- 日野永一 (1986) 「万国博覧会と日本の『美術工芸』」吉田光邦編『万国博覧会の研究』 思文閣出版
- 平野繁臣 (1999) 『国際博覧会歴史事典』 内外工房
- 昼田栄編 (1967) 『広島県農業発達史 第3巻 畜産編』 広島県信用農業協同組合連合会
- P・F・コーニッキー (1986) 「明治五年の和歌山博覧会とその周辺」吉田光邦編『万国博覧会の研究』 思文閣出版
- 藤原隆男 (2016) 『明治期日本の技術伝習と移転』 丸善プラネット
- 福間良明ほか編 (2009) 『博覧の世紀』 梓出版社
- 福間良明 (2009a) 「まえがき」福間良明ほか編『博覧の世紀』 梓出版社
- 福間良明 (2009b) 「第一〇章 戦時博覧会と『聖戦』の綻び」福間良明ほか編『博覧の世紀』 梓出版社
- 古川隆久 (1998) 『皇紀・万博・オリンピック』 中央公論社
- 古島敏夫 (1966) 『体系日本史叢書 12 産業史Ⅲ』 山川出版社
- ペーター・パンツァーほか編 (2022) 『1873年ウィーン万国博覧会』 思文閣出版
- 松田京子 (2003) 『帝国の視線』 吉川弘文館
- 松村昌家 (2014) 『大英帝国博覧会の歴史』 ミネルヴァ書房
- 丸山宏 (1986) 「明治初期の京都博覧会」吉田光邦編『万国博覧会の研究』 思文閣出版
- 三浦泰之 (2001) 「ウィーン万国博覧会と開拓使・北海道」『北海道開拓記念館研究紀要』 29
- 宮沢真一編 (1988) 『英国人が見た幕末薩摩』 高城書房出版
- 宮本又次 (1957a) 「明治後期の大阪産業の発展」『大阪工業会月報』 108

- 宮本又次 (1957b) 「明治後期の大阪産業の発展」『大阪工業会月報』109
- 村形明子 (1986) 「フェノロサの見た建国 100 周年記念フィラデルフィア万国博覧会」『人文 (京都大学教養部)』32
- 村川友彦 (1997) 「明治期の博覧会と近代日本」『東北学院大学東北文化研究所紀要』29
- 山路勝彦 (2008) 『近代日本の植民地博覧会』風響社
- 山本光雄 (1970) 『日本博覧会史』理想社
- 横山秀樹 (1980) 「新潟県における明治時代の博覧会・博物館史」『國學院大學博物館學紀要』5
- 横山恵美 (1995) 「内国勸業博覧会出品状況にみる豊島区地域の産業動向」『生活と文化 (豊島区立郷土史資料館)』9
- 芳井敬郎 (1968) 「第五回内国勸業博のディスプレイ」吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版
- 吉田光邦 (1970) 『万国博覧会』日本放送出版協会
- 吉田光邦編 (1985) 『図説万国博覧会史』思文閣出版
- 吉田光邦編 (1986) 『万国博覧会の研究』思文閣出版
- 吉見俊哉 (1992) 『博覧会の政治学』中央公論社
- ロザリンド・H・ウィリアムズ (1996) 『夢の消費革命』工作舎
- Jeffrey A. Auerbach (1999) “The Great Exhibition of 1851: A Nation on Display, New Haven, Conn. and London” Yale University Press
- Jeffrey A. Auerbach, and Peter H. Hoffenberg 編 (2008) “Britain, the Empire, and the World at the Great Exhibition of 1851” Aldershot, UK, and Burlington, US: Ashgate
- Louise Purbrick 編 (2001) “The Great Exhibition of 1851: New Interdisciplinary Essays, Manchester” Manchester University Press